

## 論文要旨

[目的]父親役割を獲得するための具体的な介入方法を明らかにし、その有用性を評価・考察すること。

[方法]医学中央雑誌Web(Ver. 5)並びに、MEDLINE/PubMed、The Cochrane Library、CINAHLを用いて検索した。文献の選択基準はRCTとし日本国内で入手可能な和文献と英語文献とした。内容はリサーチクエスションに基づき、男性の父親に関する意識、行動、役割について明確に記載されているもの、エビデンス評価が可能なものとした。

[結果]採用文献は英文献6件、和文献1件の合計7件で、RCTが6件、準RCTが1件であった。本研究に採用した7件の方法論的な質は、選択バイアス、症例減少バイアス、その他のバイアスの3つが認められた。さらに5件は結果に影響を及ぼすと思われるようなバイアスによるリスクの高さは認められなかったが、Bryan AA. (2000)と山口, 佐藤ら(2015)の2件は結果に影響を及ぼすと思われるようなバイアスによるリスクの高さが認められた。介入の内容は6件が教育プログラムを採用し、また1件が父親と児が遊ぶ様子をビデオに撮り、撮影後にフィードバックを行うという方法であった。教育プログラムで採用されていた方法は全部で4つ(参加者同士の交流を促すプログラム、演習プログラム、講義型プログラム、カップルでのみ行うプログラム)であった。介入の時期は産前のみに行われた文献、産後のみに行われた文献、妊娠期間中から産後にかけて行われた文献が各2件ずつ、産前介入群・産後介入群・非介入群の3群に分けて行われた研究が1件であった。介入の回数は1-8回、介入の1回あたりの時間は、30分-2時間であった。実施者の人数についての詳細はなく、実施者の概要は平均15年以上の経験を持つ教育者、インストラクター、訓練し認定を受けたファシリテーター、開業医、訓練を受けた産前教育に関する教育者、認可された心理療法士、研究者本人と統一されていなかった。また実施者の性別について記載があったのは、Doherty, W. J., Erickson, M. F. et al. (2006)のみで、男女ペアのインストラクターを1人ずつ採用していた。アウトカムには父親役割獲得を目的とした教育プログラムでは5種類(父親の児への関わりの変化、父親の思いの変化、父親の行動の変化、夫婦関係の変化・満足度、育児を行う上での身体的・精神的健康)に分類でき、ビデオ撮影とフィードバックのアウトカムは「父子相互作用の変化」の1つであった。介入の効果は、「父親の児への関わりの変化」をアウトカムにした3件全てに介入の効果が認められた。「父親の思いの変化」をアウトカムにした2件の文献のうち、効果が認められたのは1件で「子ども観の変化」というアウトカムのみであった。「父親の行動の変化」をアウトカムにしている2件の文献のうち1件は有意差があり、もう1件は有意差はなかったが介入による変化が見られた。「夫婦関係の変化・満足度」をアウトカムにしている2件において、「夫婦の満足度」は有意差が無かった。「夫婦関係」については2件とも有意差は無かったが介入による変化が見られた。「育児を行う上での身体的・精神的健康の状態」をアウトカムにしている1件の文献では介入の効果が無かった。

[結論]以上より、「父親の児への関わり」というアウトカムに限りDoherty, W. J., Erickson, M. F. et al. (2006)、Benzies, K., Magill - Evans, J. et al. (2008)、Shapiro Alyson et al. (2011)の3件が有用性のある介入を行っていたのではないかと考えられる。今回得られた結果を元に、今後はGREADシステムを用いてエビデンスの質を検討し、日本への適応に向けた強い確信を得ていこうと考える。